

CONTENTS 目次

- 02 特集 この町のカタチ
「葉に刻まれた町の記憶」
- 12 第47回町郷土芸能発表会
- 13 叙勲受章者紹介ほか
- 14 除雪のお知らせ / 盛岡北部行政事務組合決算
- 16 まちひときり / お元気ですか
TOPIC1 町総合防災訓練
TOPIC2 防火パレード
- 18 NEWS × SPORTS
- 20 図書館だより / 町の文芸 / KOBIRU じかん
- 22 町民カレンダー
- 24 健康だより / 町からのお知らせ
- 26 情報インデックス / よろこびかなしみ
- 28 沼高 With / 美術館情報

葉に刻まれた町の記憶

昭和のはじめ、岩手町の畑に芽吹いた小さな葉は、やがて町を支える大きな力となった。葉タバコは人々の暮らしを潤し、季節ごとに畑を彩りながら、86年もの時を刻んできた。最盛期には936戸の農家はその葉を育て、町の経済を支えたが、令和の今、担い手はわずか69戸にまで減った。キャベツの町として知られる岩手町には、もうひとつの物語がある――。葉に託された誇りと記憶を、今こそ振り返りたい。

今だからこそ伝えたい
この町のカタチがある

町に生きる人々の姿や思いを紹介し、ふるさとのこれらを考える特集「この町のカタチ」。

今回は、栽培が始まって86年の歴史を刻む「葉タバコ」をクローズアップ。葉タバコの栽培が始まったのは昭和14年、当時の沼宮内町長・柴田兵一郎氏の働きかけがきっかけでした。その背景には、昭和金融恐慌や世界恐慌による深刻な不況、さらに戦時体制へと移り変わる激動の時代がありました。町に暮らす人々が安定した収入を得られるようにとの願いから、葉タバコの導入が進められたのです。

86年の歳月を経て、最盛期には936人を数えた耕作者も、令和7年現在では69人にまで減少しました。作付転換や高齢化、後継者不足など要因はさまざまですが、今日に至るまで代々受け継ぎ、町の葉タバコを支え続ける生産者の姿は、ふるさとの営みそのものです。知られざる草創期や代々引き継いできた農家たちの思いを紹介します。



東京五輪が行われた昭和39年、聖火が町内の若者に引継がれながら南北を縦断。この年に、町内の葉タバコ生産者は936人とピークを迎えた

町村合併後の葉タバコ
昭和30年7月21日、1町3カ村が廃止され、岩手町が発足。同33年9月、たばこ耕作組合法に基づき法人組合「北岩手たばこ耕作組合」が設立され、組織的な体制が整いました。品質の向上と安定生産のため、公社からの乾

燥施設補助により、葉タバコ乾燥室が次第に普及。同39年には、作付面積の拡大を展覧した結果、生産量が大幅に増加しました。以後、霜や降ひょう被害を受ける年もありましたが、平成6年には14億円を売上げ、国内有数の生産地へ成長していきました。

町村合併以前の葉タバコ生産実績 (「岩手県たばこ史」 P.324)

年度	旧町村	人数	面積	出荷重量	代金	1kg代金
昭和14	沼宮内町	35人	3.82ha	7,663.5kg	5326円270厘	695厘
	川口村	59人	6.78ha	13,432.5kg	9347円700厘	696厘
	一方井村	28人	3.19ha	6,349.5kg	4126円185厘	650厘
	御堂村	67人	8.71ha	17,293.0kg	1万2230円790厘	707厘
	計	189人	22.5ha	44,738.5kg	3万1030円945厘	694厘
昭和29	沼宮内町	35人	3.83ha	7,424.5kg	118万9660円	160円
	川口村	73人	7.86ha	14,032.0kg	246万1875円	175円
	一方井村	151人	20.98ha	42,934.0kg	663万7425円	155円
	御堂村	114人	11.46ha	21,167.0kg	312万4560円	148円
	計	373人	44.13ha	85,557.5kg	1341万3520円	157円

町の葉タバコ生産実績 (5年ごとに掲載、赤字は最高値)

年度	人数	面積	出荷重量	代金	1kg代金
昭和34	619人	95.67ha	215,114.5kg	3507万1065円	163円
昭和39	936人	208.14ha	568,712.0kg	1億5773万4455円	277円
昭和44	699人	194.90ha	489,052.0kg	2億2724万100円	465円
昭和49	589人	275.24ha	765,582.5kg	7億4133万5275円	968円
昭和54	534人	306.49ha	828,428.5kg	10億6542万9105円	1286円
昭和59	493人	289.75ha	755,762.0kg	11億3320万6585円	1499円
昭和63	407人	257.85ha	723,019.5kg	9億1636万5535円	1267円
平成元	359人	231.63ha	724,357.5kg	10億1928万3825円	1407円
平成6	320人	247.70ha	845,130.0kg	14億5236万1550円	1719円
平成11	285人	233.29ha	613,031.0kg	11億2000万1655円	1827円
平成16	247人	209.14ha	535,734.0kg	9億5078万350円	1775円
平成21	210人	180.63ha	443,967.0kg	8億2774万2355円	1864円
平成26	144人	124.98ha	308,515.0kg	5億6629万1793円	1836円
平成30	125人	105.62ha	264,836.5kg	5億268万730円	1898円
令和元	115人	97.68ha	287,406.0kg	5億4954万5292円	1912円
令和6	73人	60.81ha	166,158.7kg	2億9962万3175円	1803円

(「岩手県たばこ史」 P.328、県たばこ耕作組合提供より)



昭和13年頃、愛宕山頂から撮影された沼宮内町



昭和14年1月 当時の沼宮内小学校



昭和10年代前半 当時の沼宮内自治会館

葉タバコ耕作の始まり

昭和10年代の前半、当時の沼宮内町長だった柴田兵一郎氏が、県北の貧困な営農に悩む農家の振興を図るため、最も安定した換金作物として目を付けたのが「葉タバコ」でした。当時は、煙草専売法^{※1}に基づき、葉タバコの生産から販売まで専売局が管理していました。耕作の許可を得るために、柴田氏を中心として再三にわたり陳情運動を展開。その結果、専売局の理解と協力を得て同14年、専売公社の許可と同時に沼宮内町を中心に近村合わせて、36戸の畑で葉タバコ(バーレー種)の耕作が始まりました。

以来、専売公社や柴田氏などが熱心に普及を進め、年々耕作地は増えていきました。葉タバコは沼宮内町を中心に県北一帯へ広がり、現在の基礎を作りました。



ひょういちろう 柴田 兵一郎 氏

大正13年慶応義塾大学経済学部を卒業後、第一銀行を経て昭和5年盛岡銀行取締役、同6年より沼宮内町長を3期務め、その後貴族院議員、衆議院議員、大蔵参与官として国政でも活躍。国道4号線の切り替えや県北葉タバコの奨励など町勢発展の基礎を築いた。また、同25年に東北銀行を創立し、東北・町開発ならびに経済発展にも大きく貢献された。

葉タバコ耕作組合の誕生

葉タバコ耕作の始まりと共に各地区に、タバコ耕作組合が組織されます。そのなかで最初に結成された組合は、同14年に沼宮内町を中心に1町7カ村で結成された「沼宮内地方たばこ耕作組合」でした。続いて、同15年に雫石地方、二戸地方の組合が発足。これらのタバコ耕作組合が合同して同19年12月、県北たばこ耕作組合連合会が結成され、初代会長に柴田氏が就任。同33年の法人化組合設立までの間、この大きなタバコ耕作組合組織が機能と役割を十分に発揮しました。

※1 煙草専売法 明治31年に施行された煙草専売法が基盤。同37年に煙草専売法として栽培から製造・販売までが国の管理で行われるようになり、生産量や品質が向上。昭和60年に廃止。

葉に刻まれた町の記憶



1_出荷のためブロック状にされた葉タバコ 2_鑑定員に格付けされ、緊張した面持ちで見守る生産者 3_毎年買い入れ現場には佐々木光司町長が訪れ、生産者を激励する 4_葉タバコを持ち上げて中を確認している鑑定員 5_格付け後には鑑定員が生産者に講評をする

葉タバコの売買と格付け

収穫された葉タバコは、JTが買い入れます。しかし、全て同じ値段で買い入れるわけではありません。JTとたばこ耕作組合が決定する「標本葉タバコ」を基準に、JTの鑑定員が格付けを行い、耕作組合の立会人が合意することで価格が決定されます。

葉タバコは下位葉から中葉、合葉、本葉、上葉の順に収穫され、乾燥を経て梱包されます。鑑定では、梱包が開いた状態の葉タバコを一包ずつ確認し、表面と小口と呼ばれる側面、さらに全体を見たイメージを合わせて格付けします。鑑定員は、時折葉を持ち上げ、内部を確認しながら鑑定します。

格付けが終わると生産者に講評が伝えられ、評価が下がった理由や翌年に向けた改善点が示されます。こうして、生産者とJTが共に次の年へと歩みを進めていきます。

葉タバコ売買は、生産者にとって、1年の収入が決まる緊張の瞬間。約10カ月間の作業、思いがこの日に詰まっています。

岩 手町は、県内でも二戸市に次いで2番目の生産量があり、後継者が豊富で意欲ある産地です。若くて勢いのある人材がそろっているのが、これからの当組合を引っ張っていってくださることを期待しています。

県北地域の葉タバコの発祥は岩手町であり、今年で86年と歴史ある農産物です。生産者の高齢化や後継者問題などさまざまな要因はありますが、人員は減少し続けています。それでも親の代から営農を引き継ぎ、現在も頑張っている農家は、誇りをもってこれからも生産に励んでいきたいです。



県たばこ耕作組合
組合長 坂本 誠 さん(68)
=一戸町=

太陽の下で働く幸せを

葉タバコの魅力は、農家同士のつながりにあります。仲間の支えや後押しがあつてこそ今の自分があり、葉タバコを中心とした経営を続ける理由にもつながっています。仲間たちには心から感謝しています。

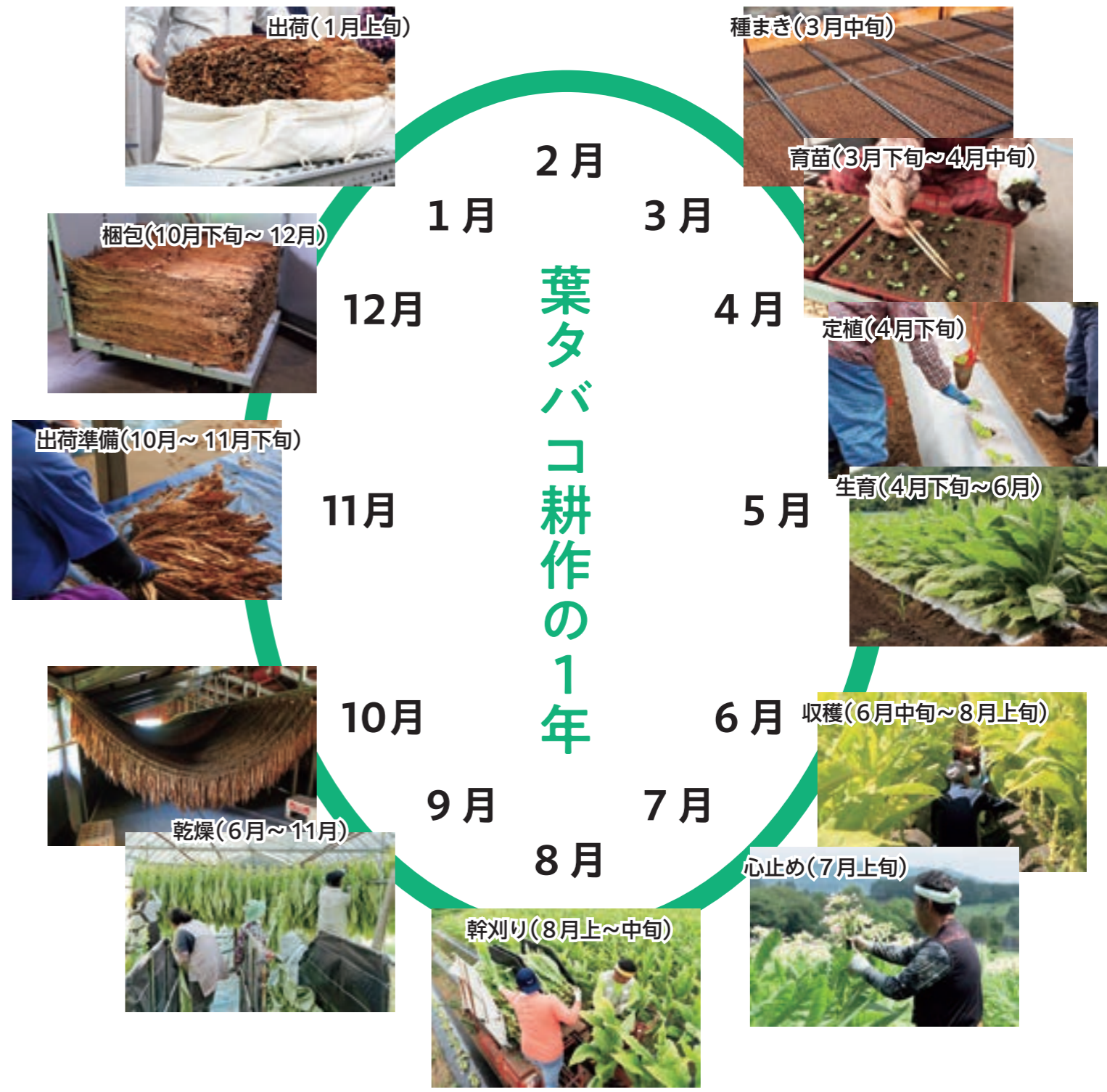
私が栽培を通じて一番伝えたいのは「太陽の下で汗をかいて働ける幸せを感じてほしい」ということです。人によってはつらいと感じるかもしれませんが、葉タバコは手をかけて育てた分、必ず見返りがあります。そのやりがいと喜びを、これからの時代へ継承していきたいです。

Chap.3 葉タバコの1年

JT契約農家による栽培

植物としてのタバコは、ナス科タバコ属に分類されます。同じナス科の植物であるナスやトマトなどと同様にアメリカ大陸を原産地とし、世界各地で栽培されています。日本では、江戸時代から各地で耕作されるようになり、土地ごとに異なった気候や土壌に育まれ、黄色種やパーレー種など多くの品種が生まれました。県を含む東日本では、パーレー種が主に生産されています。

国内の葉タバコ生産は、日本たばこ産業(株)(JT)との契約農家により行われ、種まきから出荷まで約10カ月かけて栽培されます。





JTと二人三脚で心をつなぎ、
たくさんの未来を築いていきたい



祖父の代から続く葉タバコを
仲間と共に未来へつなぎたい



ひろたが
三浦 啓臣さん(37)
=太田=

JT公式YouTubeチャンネル
「密着ファーマーズ」



#1 岩手県岩手町
いわてっこ
#2 南海キャン
ディーズしずちゃん
がスマート農業
を体験

今から10年前、28歳の時に父親が亡くなり、突然農家を継ぐことになりました。当時はすでに結婚しており、幼い子どもが3人。継いですぐの2、3年はとにかく大変でした。周囲の人たちに助けをもらいながら、試行錯誤を重ね、やり方をとにかく考えました。今この時間を大切にしたいという思いで、子どもを優先しながら日々を駆け抜け、今に至ります。私はJTの協力を得ながら、さまざまな活動に取り組んでいます。葉タバコと並行して稲作も行い、収穫したお米をJTが展開する「Farmersマルシェ」を活用して、町産業まつりなどのイベントで販売しています。また、今年はJT公式YouTubeチャンネルの「密着ファーマーズ」という番組の取材を受け、農業のPRもしています。



町産業まつりでは、県たばこ耕作組合とJTが生産者と消費者をつなぐFarmersマルシェを出店

JTは、技術支援はもちろんのこと、生産者に寄り添った活動を続けてくださり、大変心強い存在です。昨年からは、児童養護施設への支援を始めました。「1人でも多くの人を支援してあげたい」心を救い、心をつなぐこの活動にも、JTからたくさんの協力をいただいています。今後、私たち生産者とJTが二人三脚で歩みを進め、地域と農業の未来を築いていければと思います。



町葉たばこ振興会
会長 三浦 新吾さん(59)
=下鴨沢=

一方地域は昭和20年頃が増えたと聞いています。小さい頃、この辺りは見渡す限り葉タバコしか見えないくらい盛んでした。私が親から営農を引き継いだのは18年前、41歳の時でした。葉タバコの作付けは祖父の代から始まり、私で3代目。10歳頃から手伝いを始め、高校を卒業してすぐに就農しました。作業の機械化が進む中だったので、就農に抵抗はありませんでした。ただ、手伝いと仕事では当然違い、心が折れそうになることもありましたが、そんな時に支えになったのが、地域の耕作仲間でした。身内に不幸があればみんなで手伝い、苗が失敗すれば分け合うなど互いに助け合いながら歩みを進めてきました。葉タバコは農家同士のつながりに加え、収入を計算できる点も特徴です。JTが買

社会情勢の変化はありますが、会社が求める限り私は営農を続けていくつもりです。高齢化や後継者問題により、あと4、5年で生産者は大幅に減少すると予想されます。それでも県内、さらには国内でも有数の産地として、この地域が残りが残り、未来へと受け継がれていくことを願っています。



「期待と不安が入り混じるが、苗を植える作業が一番好きだ」と三浦さんは語る

風に揺れる畑の葉は、今も静かに町の歩みを語り続けています。昭和14年に始まった葉タバコの栽培は、最盛期には900人を超える耕作者が町を支え、緑の畑は地域の繁栄を象徴していました。令和の現在、その担い手は69人まで減り、町の風景は大きな転換期を迎えています。

それでも、葉タバコに込められた思いが消えることはありません。農家にとって葉タバコは、生活を支える作物であると同時に誇りであり、世代を超えて受け継がれてきた技術と記憶の結晶です。葉一枚一枚には、人々の暮らしと町の歴史が刻まれています。

キャベツの町として知られる岩手町には、もうひとつの大切な農業の歴史があります。葉タバコの歩みを記録し語り継ぐことは、町が積み重ねてきた多様な足跡を、未来へ確かに伝えていくことにつながります。

葉に刻まれた町の記憶を、私たちはどのように受け止め、次の世代へと伝えていくのか。その問いに向き合うことがふるさとの未来を守る道になるのかもしれない。